

目地からの建築

－スケールを横断した建築の構築手法－

_Consept

建築の「構築性」に興味がある。

私は研究室で実施の建築に携わる機会があった。それは 1/1 で納まりを検討し、現場に通い、実際に立ち現れてくるモノに向き合うという作業の連続であった。大学の設計課題ではただのダブルラインで描かれていた壁は現実には LGS や構造合板、PB、塗装、配線など多くの部材によって成立しているということを実感したのである。そこには今までの大学の設計課題では体験したことのない実際につくる難しさと、それと同時に作る楽しさや喜びを感じることのできた貴重な経験となった。大学で学びきれない「その先」に建築のおもしろさを感じたのである。

本研究・設計では「目地」というこれまで脚光を浴びることのなかった部位を対象とすることで、建築の「構築性」についての新たな視点を得ることが目的である。

建築は物質と物質、様々な部材の複合体としてかたちづけられる。そのため、「目地」というこの一見懐かしいディテールはそれらをつなぐために必要不可欠であり、建築の構築的な知恵と技術が結晶化する部位であるといえる。

また、目地の定義を「〇〇と〇〇の間」とすることで、スケールを横断した、本来のディテールの枠を超えた領域で建築の「構築性」に触れることを試みている。

具体的には、特徴的な目地をもつ建築家 8 人・18 作品を分析対象とし、そこから「目地パターン・ランゲージ」を抽出した。設計においてはこれを用い図書館をもつ都市公園を設計する。

_目地の定義

「目地」とは通常、建築部材と部材がぶつかるときに生じる線状の部分のことを指すが、本研究ではもう少し目地の解釈を広げてみたい。イムズ夫妻による短編映画である「POWERS OF TEN」を参考すれば、大小さまざまなスケールを横断して私たちの世界は物質によってつくられそれらひとつひとつの関係性の中に目地を発見することができる。よって本研究では以下のように目地を定義する。

〇〇と□□の「間」に存在するもの



プランド「ティマイコス」より

_分析作家



1. Le Corbusier



2. Mies van der Rohe



3. Alvar Aalto



4. Carlo Scarpa



5. Oscar Newman



6. Peter Eisenman

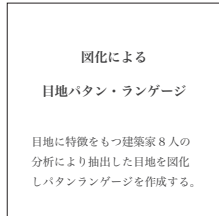
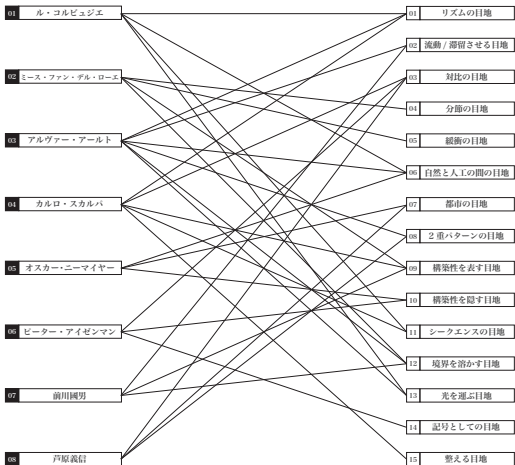


7. 田岡 健児



8. 戸塚 義昭

_抽出した目地の集計表



01. リズムの目地



02. 流動 / 滞留させる目地



03. 対比の目地



04. 分節の目地



05. 緩衝の目地



06. 自然と人工の間の目地



07. 都市の目地



08. 2重パターンの目地



09. 構築性を表す目地



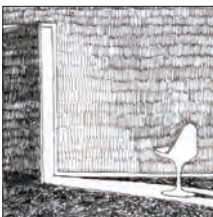
10. 構築性を隠す目地



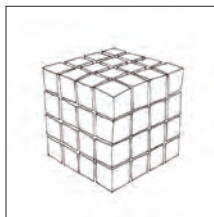
11. シークエンスの目地



12. 境界を溶かす目地



13. 光を運ぶ目地

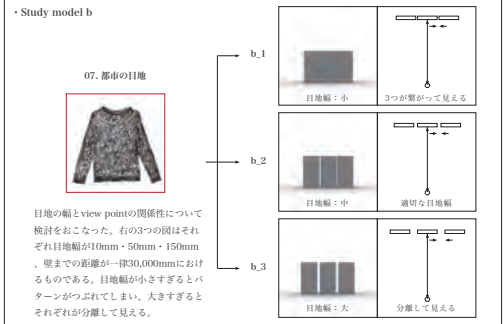
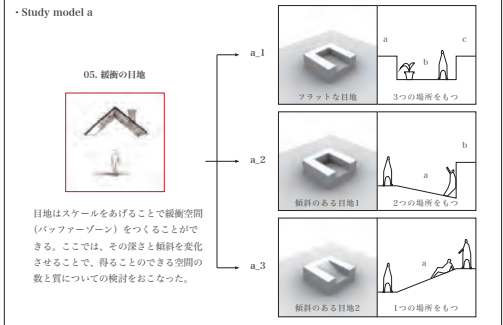


14. 記号としての目地



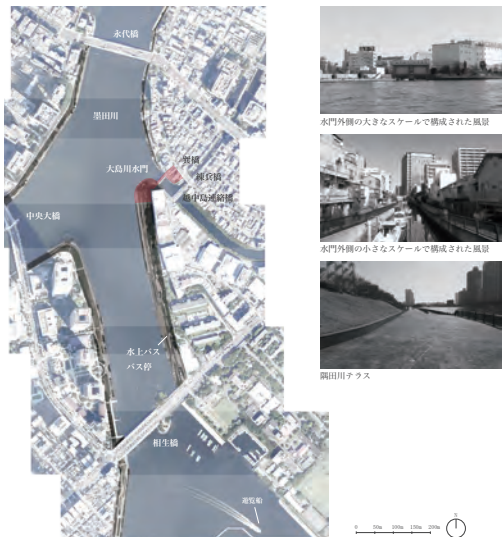
15. 繋げる目地

Study model の例



_Site survey

目地からの建築のケーススタディとして、図書館をもつ都市公園を設計する。敷地は江東区永代、大島川水門周辺である。大島川水門は川幅約 200m の開田川が幅 30m の大狭川へと分岐する接続点に位置し、丁渡川のスケールが変化する地点である。またそれと呼応して水門の内側と外側で街のスケールも変化している。川や街の道を「目地」と見ればここにさまざまなスケールの目地を確認することができる。



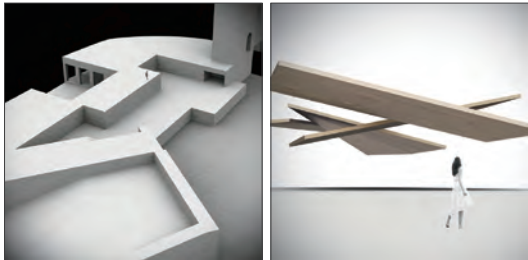
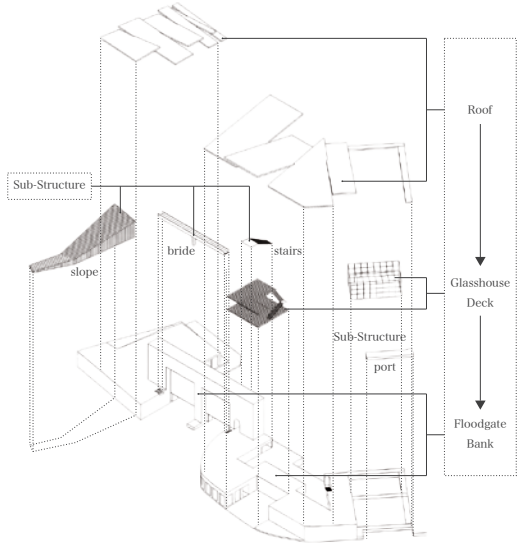
開田川テラス





目地からの建築
Program : 図書館
Structure : 鉄骨造・一部鉄筋コンクリート造

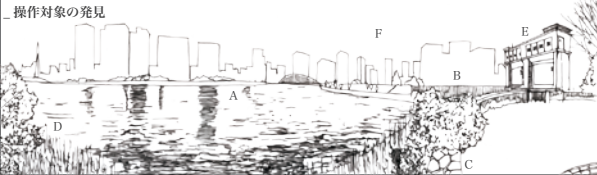
Axonometric



Ground model

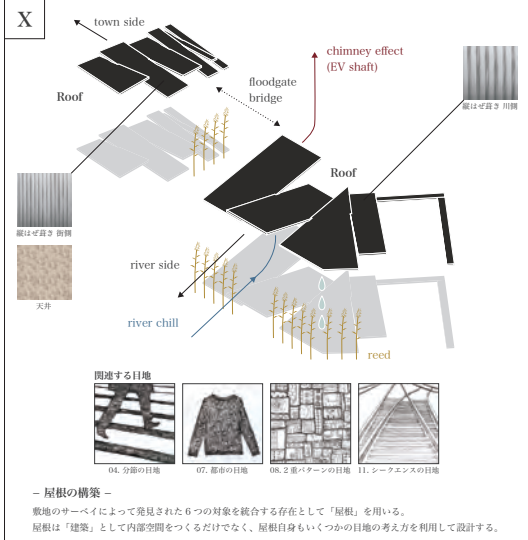
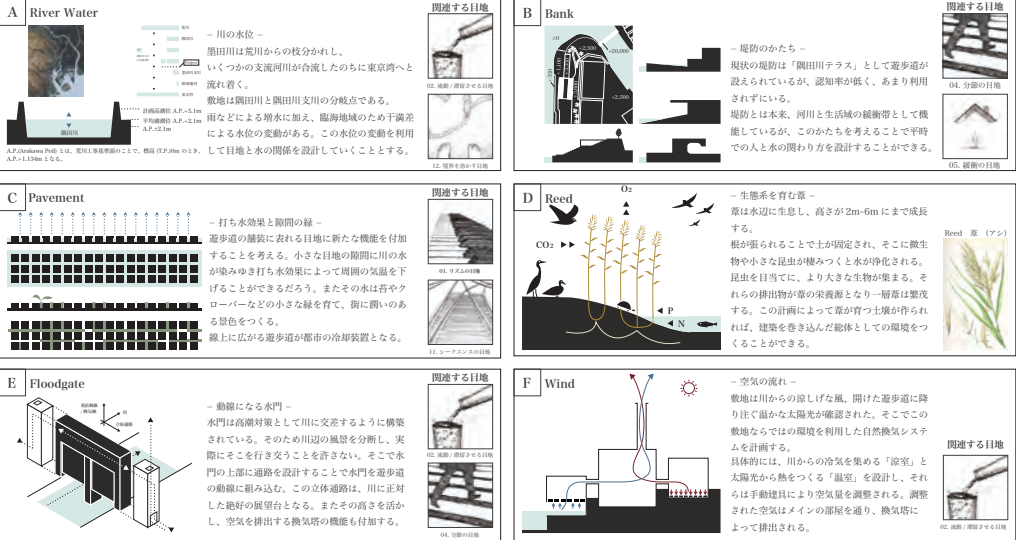
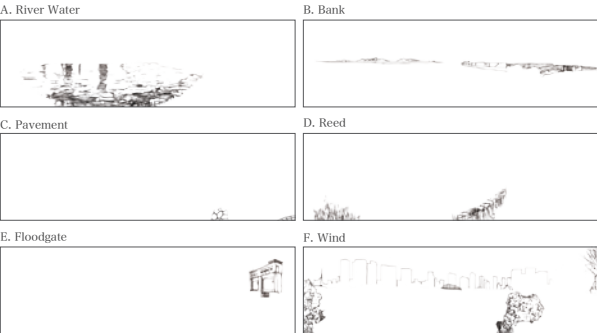
Roof model

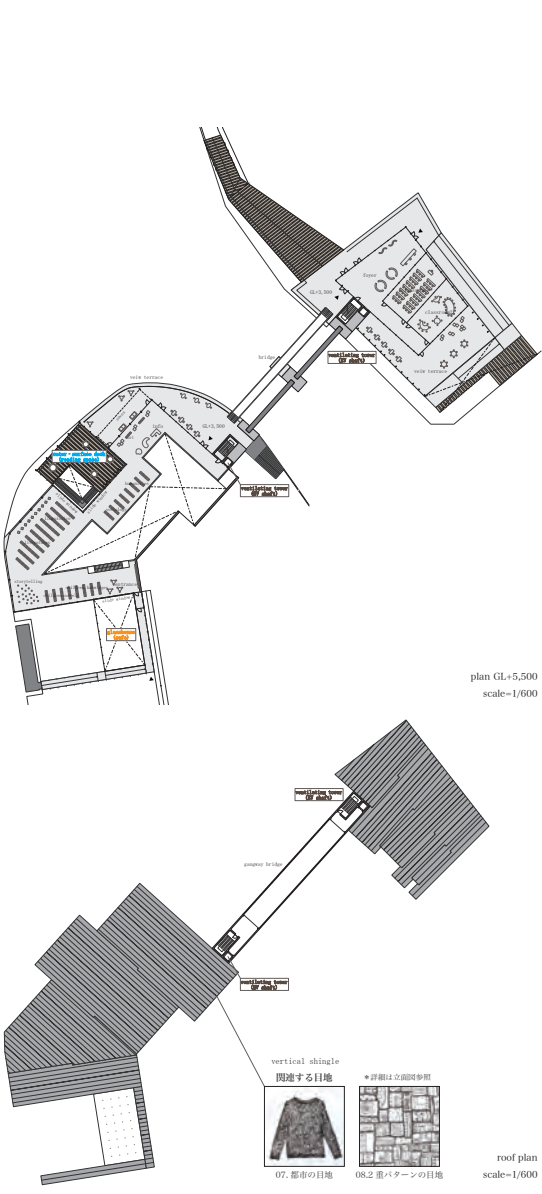
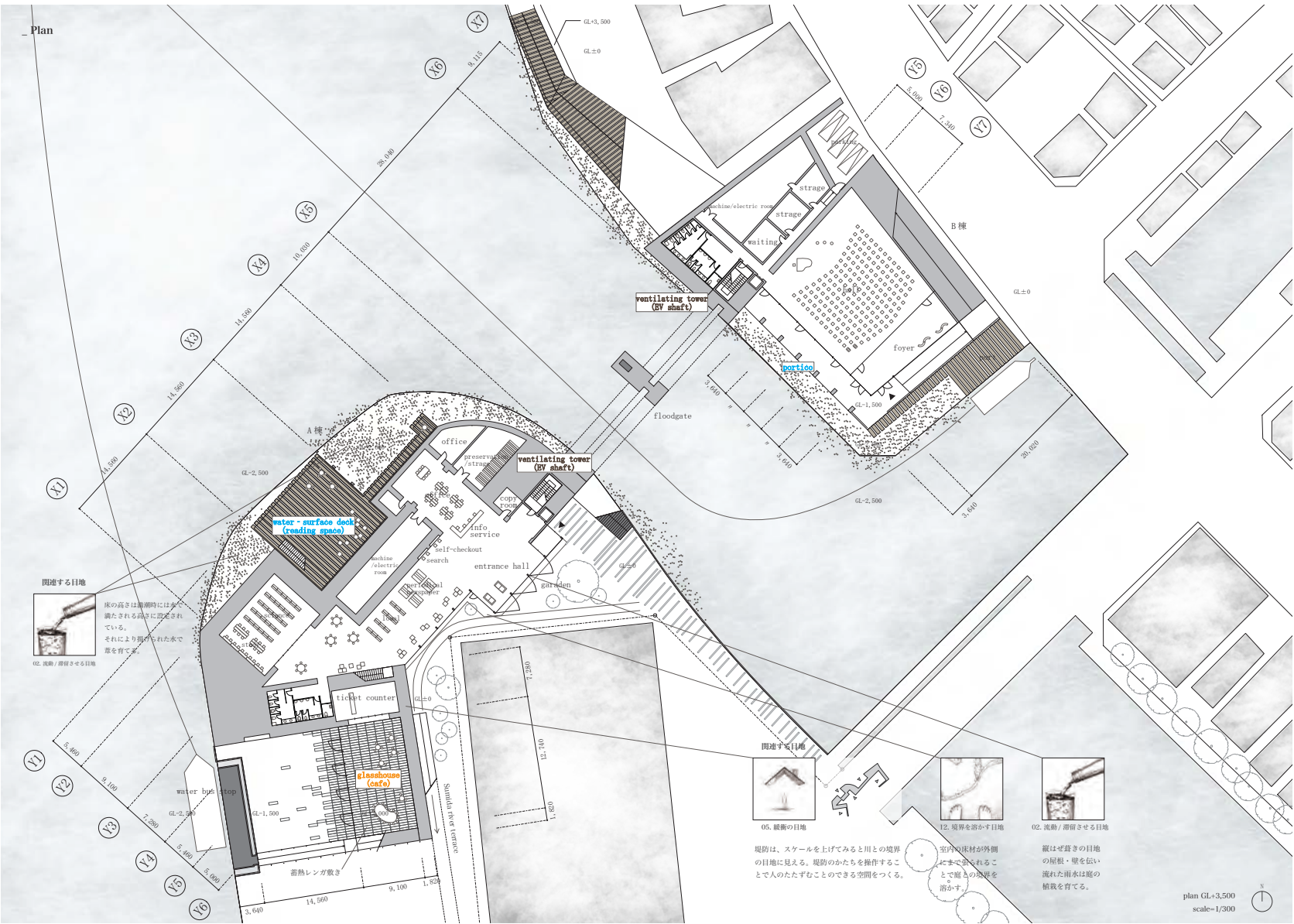
堤防の高さと同じレベルの隅田川に面した開けた空間と堤防の内側の落ち着いた空間、それらを跨ぐようにして屋根が連なる。



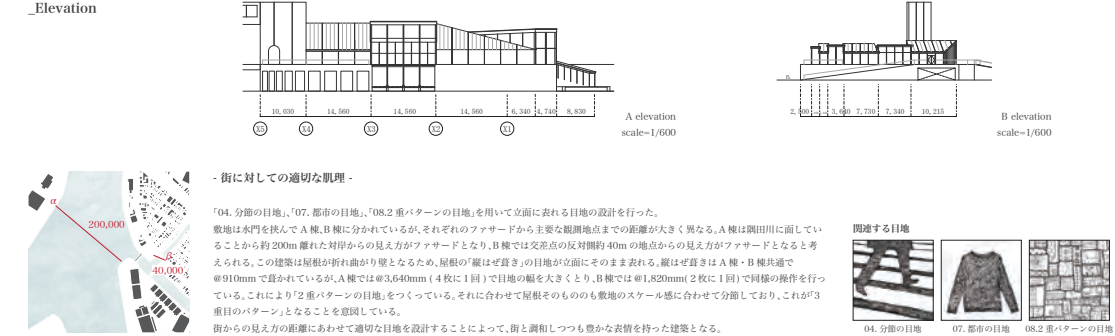
敷地では6つの操作対象となりそうなものを発見した。この6つを目地パターンを使って操作していく。

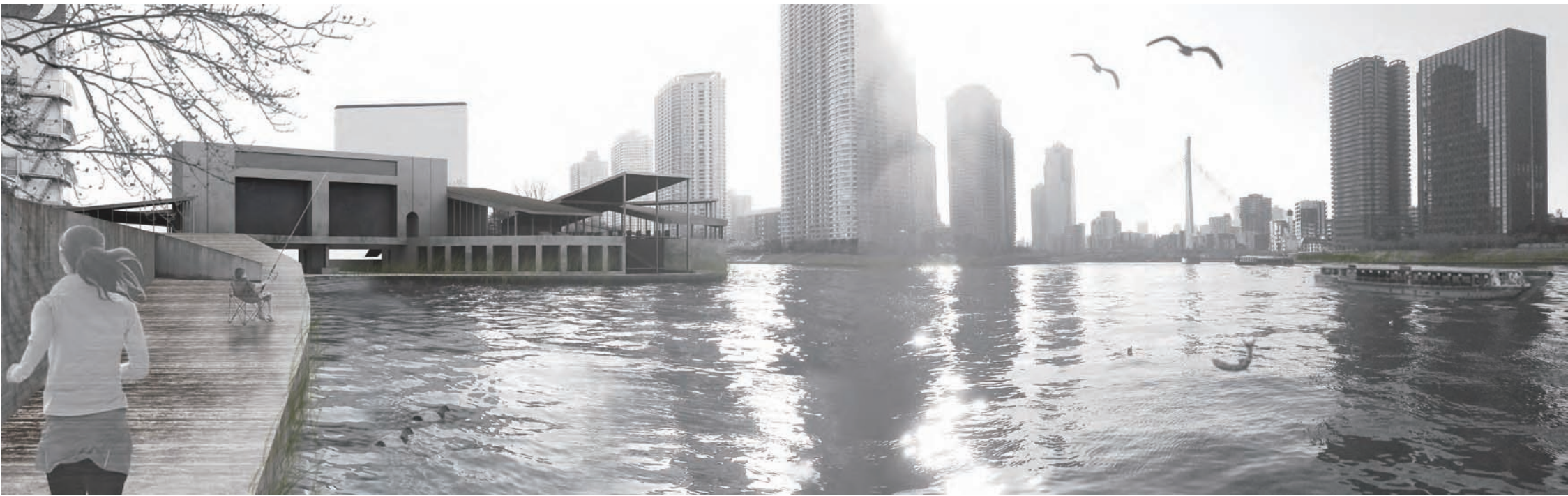
sketch





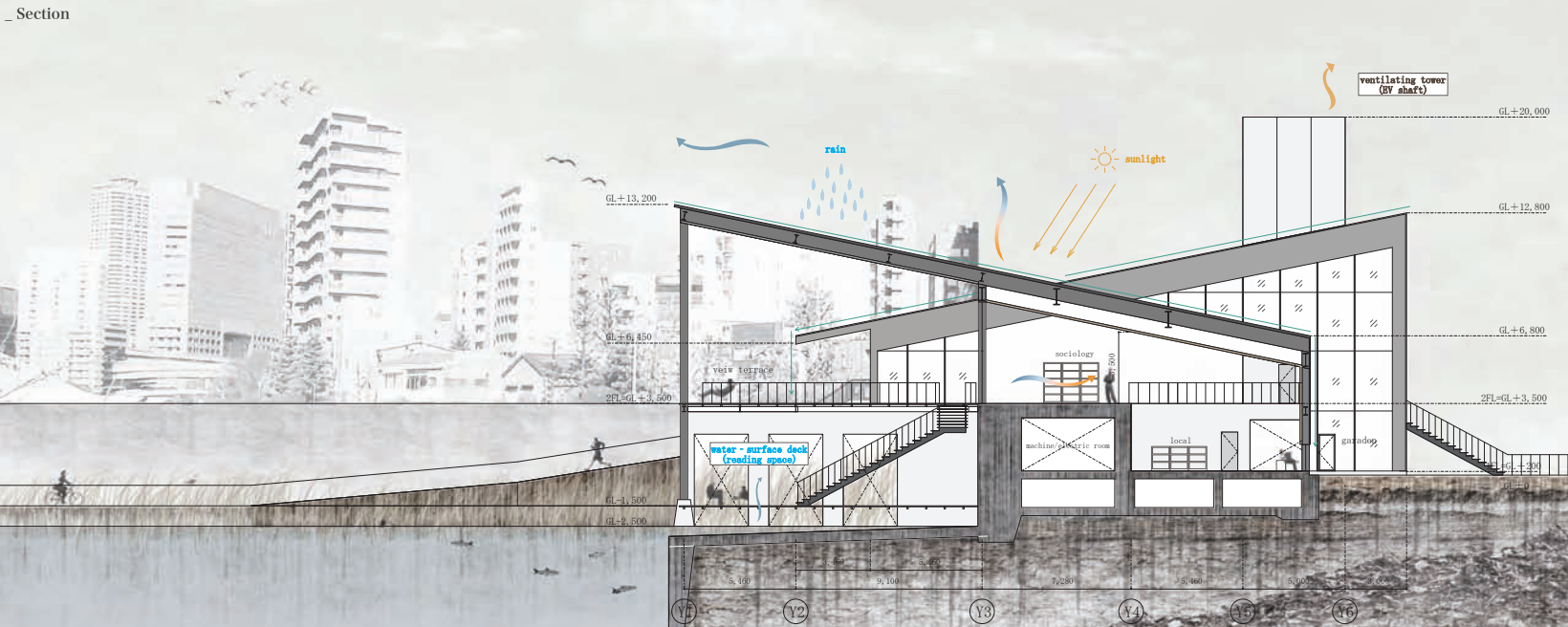
Elevation





隅田川テラスからみた外観

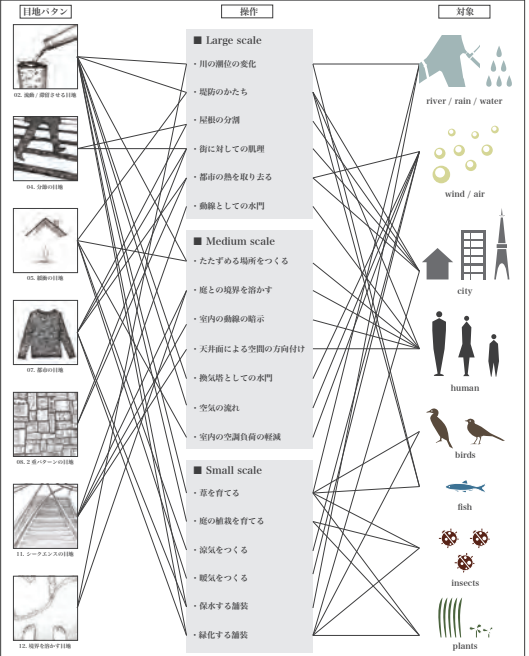
_ Section



- 浸透する目地 -

隅田川のはとりに建つこの建築は、「水」という自然界で最も変化に富む物質を「目地」を通して利用する。そのプロセスは次の通りである。
ここで用いられる屋根材は縦はぜ葺きであり折れ曲がり壁となっている。雨が振れば雨水はこの縦はぜ葺きの目地を伝って薄く屋根面全体に引き延ばされる。
屋根の上で薄く引き延ばされた水は太陽光によって暖められ液体から気体へと状態変化するが、このときに発生する冷気は周囲の街並に届けられる。(屋根が冷やされることによって内部の空調負荷も軽減されている)降雨などにより屋根が水吸いすぎた場合は、庭や草に流れることで周囲の植物を育てる。(葦が「育つこと」によって川の水位は向上する)これは建築による街への「打ち水」である。
また、建築の内部の環境に對しても最大限にこの場所にもある環境を利用する。夏はデッキ下の川の冷気を換気塔の排気効果によって吸い上げ、内部にまで涼しいな空気を運ぶ。冬に対しては日当たり環境の良い周辺に設えられた温室によって暖気をつくり、夏と同様に換気塔によって空調する。
目地を通った川の水は浸透し、気体となり街とこの図書館内に届けられる。ここには建築の従来の枠組みを超えた、大きな総体としての環境が生まれている。

四連する目地



- 総論 -

この建築では大小さまざまなスケールを横断して「目地」を扱っている。「目地」は建築自身が構築される上で必要不可欠なものであると同時に、そこに存在する周囲のもの(利用者である人はもちろん、街の建築群、川や都市公園の植物など)に対して適切な肌理を持つためであるということができる。屋根の分割による目地は「都市」に対しての肌理であり、天井は内部空間を利用する「人」に対する肌理であり、外部の舗装の目地はそこに「植物」が育つ為の肌理なのである。
目地に着目することによって人を含めた大小様々な生物や有機物が入り込むことのできる「ニッチ」が生まれているのだろう。ここに建築が構築されることによって人間だけに留まるといえない、周囲のあらゆるスケールに呼応した「総体としての環境」をつくることができた。